



黄色に変色した一枚  
写真、正確な時期はわ  
らないが、戦前の満州  
の家族写真である。

歴史の中の自分

人生の節目①

私事で恐縮だが、私は  
一九四〇年（昭和十五  
年）一月八日、旧満州・  
奉天で生まれた。きょう

そして、その歴史の中に自分も生きてきたのだと自覚する時、不思議に両親はもちろん、すべてに

これで良いのだろうか。今や女性より短い男性の平均寿命ですら八十年を超えた。昔から長寿は

ほしいと願うからだ。だから私にとつて「死」は神の領域へのステップで

る大切な節目だからとは  
つぴまで用意してもらつ  
た。長い先人たちの歴史

今は七十五回目の誕生日である。今は中国の瀋陽となつた奉天、リュックサック一つで命がけで日本に引き揚げて来たのは昭和二十一年、幼なかつたので余り記憶にない。しかしこの写真は寒い満州で父や母が激動の時代を生きた歴史を思い起こせる

ものは姿を消し、個人主義、利己主義が目立つ時代となつた。今、物質的には過去に人類が経験したことがないほどの大変な豊かさの中に（少なくとも先進国に住む私たちには）生活しているにもかかわらず、それが「当たり前」と思つて生活している。

A photograph of an elderly man with a shaved head, wearing a blue patterned kimono over a dark apron, standing outdoors. He is holding a large wooden mallet over a large stone mortar. He is smiling at the camera. In the background, there is a traditional Japanese building and some wooden crates. The text "75歳の節目を祝う餅つき" is overlaid on the right side of the image.

父母、兄、姉とこの世にあるは姉と私の二人だけだ

## 家族制のような

の神の世界に迎え入れて

でなく、後期高齢者とな

な  
が巡礼の道だ。



サビエル生誕五百周年

は七十五回目の誕生日で

ものは姿を消し、個人主

75歳の節目を祝う餅つき